



## 今年も冬がやってくる！ 子牛の肺炎 ～予防的治療～

肺炎(呼吸器病)は下痢と同様に子牛に大きなダメージを与える疾病です。子牛がストレスなく快適に過ごせる温度は **13 - 25℃**とされています。別海町の冬期の平均気温は約-12℃(12月～3月)ですので、いかにこの時期に子牛たちがストレスを感じやすいかがわかると思います。

寒さに対応できなかった子牛はミルクの摂取量が落ち、急速に体力が奪われてしまいます。肺炎は蔓延しやすく、治療よりも予防に重点を置くべき疾病です。今回は初乳や換気、子牛をあたためる云々の話ではなく(**そこがとても大切ですが**)、農場で行われている冬場の肺炎対策を紹介します。

肺炎を引き起こす病原体はウイルスや細菌など様々ですが、単一で症状を引き起こしている場合は少なく、多くの場合**混合感染**しています。ですので、呼吸器症状を示している牛がいたらそのことをまず念頭に置いてください。

### 【抗生剤】

基本的にワクチンはウイルスに対してですが、**細菌などの感染症には抗生剤が有効**です。予防的治療を行い、真冬になる前に子牛～育成にかけて抗生剤を一斉に投与するというものです。抗生剤も種類があり、どの抗生剤を選ぶかは対象とする病原体やコストによって変わってくるでしょう。やみくもに打つことは範囲外の無駄打ちや耐性菌の出現につながりかねないので、注意が必要です。一斉に投与するのではなく、育成舎への移動の1週間ほど前に呼吸器疾患を対象とした抗生剤を一度投与するという方法などもあります。ワクチンにも共通しますが、蔓延している感染症に感染しないという考えとともに、病気を持ち込まないというのも群飼いの基本でしょう。

### 【ワクチン】

**ウイルスの予防にはワクチンが必須**です。単味のワクチンから6種混合生ワクチンのような複数をカバーしているものまであり、悩むところです。より農場にあった効果的な方法を選択するためには一度呼吸器症状を示している牛の鼻汁を採取し、その農場で蔓延している病原体を知ることでしょう。またワクチンの接種時期も様々な推奨プログラムがあり、検討が必要です(ワクチンの種類にもよりますが、具体的には2,3週令で打つ / 1,2か月齢以上で打つ / 離乳の少し前など、、、)。一回では不十分のこともあります。一般的には初乳から得た免疫が消失する3カ月前後が推奨されてきました。しかし呼吸器疾患の発生は3カ月以前が多いため、それ以前に打つのが良いとする報告もあります。

### 【でも、やっぱり環境が重要・・・】

呼吸器感染症の原因は病原体・牛・飼養環境のトライアングルが互いに関係しあっています。上記でも述べたとおり、子牛にとって冬という季節は体温を維持するためにもより多くのエネルギーが必要となります。冬期は夏期に比べて哺乳量を増やすことも一つの方法ですが、十分に暖かい環境をつくるのが出来ればベストです。換気ももちろん重要なポイントになります。

今日は飲みがイマイチだなと思ったらカーブジャケットを着せたり、冷めにくい湯たんぽなどをハッチ内に置いてみてください。**早め早めの対策がカギです！**

茅野大志

